# 空軍ニュース：中国空軍は J-10B 型戦闘機の生産を加速

漢和防務評論 20150703（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

| |
|---|
| 中国は、国産戦闘機 J-10A 型制空戦闘機を発展させた戦闘爆撃機型ともいうべき J-10B 型戦闘機の生産を加速しています。<br>A 型と B 型の違いは、空戦型と戦闘爆撃機型の違いのほか、外形も部分的に異なっています。B 型は、A 型の複雑なインテーク部分を簡素化しエンジン効率を犠牲にして武器や燃料の搭載量を増やしているようです。アビオニクスも最新型に改修し、武器システムも精密誘導武器が搭載できるように機能を付加しました。エンジンは依然としてロシア製です。 |

KDR バンコク平可夫特電：
中国成都航空機会社第 132 工場は、2014 年から J-10B 型戦闘機の生産を加速している。同工場の地上施設も更に充実した。このことから J-10B の生産が逐次軌道にのるものと判断される。工場建物外のエプロンの長さが少なくとも 470 M に延長され、新たに 5 個の格納庫が建設された。J-10A 型の生産時にはこのような大きな拡張工事は行われなかった。このような設備の拡充は、J-10B を増産すること以外に、J-20 の生産と関係があるのだろうか？さらに観察する必要がある。空軍に納入する第一グループの J-10B は、少なくとも 14 機で、全て新たに建設されたエプロン上に置かれていた。このほか少なくとも 10 機が納入前の試験飛行を行っている。このように 2015 年第一期には少なくとも 1 個連隊分 24 機の J-10B が納入される。14 機の J-10B は全て空軍向け塗装である。このことは第一グループの J-10B が空軍に装備されることを意味する。海軍航空部隊は 1 個連隊の J-10A を装備するのみである。したがって今後換装されることを意味する。明確になったことは、J-10B のコクピットが大幅に更新され、新たな HEAD-UP DISPLAY を採用、胴体構造を改修したことである。また中国としては初めて DSI（DIVERTERLESS SUPERSONIC INLET）を採用、新たなレーダー警報装置、電子対抗アンテナを取付けた。機体構造改修部分を詳細に観察すると、垂直尾翼が大きく変更され先端が三角形になっている。ベントラルフィンも形状が変更された。

電子戦能力が大幅に強化された。特に偵察、対抗能力が強化され、IRST 等々、光電センサーが増えた。このことは J-10B は J-10A に比べ多くの機能があり、特に対地、対艦船攻撃能力が付与され多用途戦闘機の範疇に入ったことを示している。J-10A は、主として空戦を目的に開発された。

成都航空機会社は、少し前に、J-10A にパッシブ・フェーズド・アレイ・レーダー

を搭載し試験を行った。KDR は、J-10B がこの種レーダーを搭載している可能性があると考える。したがってレドームの背がやや低く、扁平である。このような変更はステルス性を持たせるためのほか、パイロットの前方視野を広めるためである。J-10B と J-10A の最大の違いは、J-10B の機首がやや幅広いことである。その理由はレドームの直径が大きくなったためである。そのことによって探知距離は増加した。

J-10B の搭載武器は J-10A とは大きく異なる可能性がある。珠海エアショーで大量の空対地、空対艦ミサイルが展示された。特に空対地ミサイル、精密誘導型爆弾は、複合誘導方式、及び多種類の爆弾に対応するタイプである。これらの開発の動向から中国空軍の需要は何かが分かる。今後 J-10B は、更に多くの精密誘導武器を搭載するであろう。

しかし珠海エアショーでは、PL-12 及び PL-8 以降の次世代型レーダー又は赤外線誘導空対空ミサイルの展示は無かった。J-10B の試験飛行期間においても、新型空対空ミサイルを搭載している写真は見られなかった。しかし J-20 については、ロシアの R-77 に類似したミサイルを搭載している写真があった。したがって近い将来においては、J-10B は依然として PL-12、PL-8 を継続使用する可能性がある。J-10B は、現在最も中国らしい風格を持った戦闘機であり、今後 AESA レーダーを搭載し、高推力のエンジンに換装すれば、性能は向上する。実際上、ロシアはすでに中国向けに AL-31FN-S3 型改良エンジンを提供している。したがって現在生産している J-10B は、動力系統が J-10A に比べさらに向上している。第一にエンジンの寿命である。オーバーホール間隔が大幅に改善され、J-10A の 500 時間から 750 時間へ、推力も 3%向上した。またロシアは、中国に対し積極的にスラストベクター型 AL-31FN-S3 エンジンを売り込もうとしている。このエンジンの需要は多い。したがって KDR の推測では、今後バッチ生産される J-10B は、依然としてロシア製エンジンを搭載するものと思われる。

J-10B は、インテークの改修によって、構造が簡単になり、重量が減り、さらに J-10A に比べ複合材料の使用量が多いはずである。もし総重量が 500 乃至 700 KG 低下し、推力が 3%増加したならば、武器及び燃料搭載量が増加しているはずである。もし J-10A の搭載燃料が 6 トンで、武器搭載量が 7 トンであれば、J-10B の武器搭載量は 7.5 トンに達する可能性がある。
このような基本性能が備われば、今後 20 年間、J-10B はパキスタンのような中位の軍事発達国家に対し輸出できる可能性がある。

以上